

JPCOAR

2021.7.27 5th Anniversary

《 IN THIS ISSUE 》

- ・特集：JPCOAR5周年記念座談会「JPCOARのこれまでとこれから」
- ・メーリングリストから気になる話題をピックアップ！
：JaLCメタデータオープン化に伴う著作権処理の対応
- ・作業部会員の活動紹介 JPCOAR 事務局／コンテンツ流通・促進作業部会
- ・Hot CoCOAR CoAR Community Framework／オープンサイエンス関連の基本ドキュメント
- ・報告：学術情報基盤オープンフォーラム 2021



JPCOARは、2016年7月に3つの大きなリポジトリコミュニティが結集して誕生しました。機関リポジトリ担当者の連合組織で、リポジトリ運営の情報共有やオープンアクセス（以下、OA）思想の普及に大きな役割を果たした「デジタルリポジトリ連合（以下、DRF）」、JAIRO Cloudの利用機関同士の情報交換の場であった「JAIRO Cloudコミュニティ」、大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議のもとに設置された「機関リポジトリ推進委員会（以下、IRPC）」です。

今号ではJPCOARの5周年を記念し、JPCOARの歴代運営委員長をお招きして、オンライン座談会を企画しました。機関リポジトリのこれまでとこれからを考える一助となれば幸いです。

参照：

E1908 - デジタルリポジトリ連合(DRF)の活動を振り返って、
カレントアウェアネス-E, No.324, 2017.04.27,
<https://current.ndl.go.jp/e1908> (2021/08/26確認)

参加者（敬称略）

- 岡部 幸祐 : 2017-2018年度 JPCOAR運営委員長
日本図書館協会常務理事
- 江川 和子 : 2019-2020年度 JPCOAR運営委員長
国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員
- 木下 聡 : 2021年度- JPCOAR運営委員長
東京大学附属図書館事務部長

聞き手

- 尾崎 文代 : JPCOAR コミュニティ強化・支援作業部会
- 大園 隼彦 : JPCOAR コミュニティ強化・支援作業部会
- 山田 裕果 : JPCOAR コミュニティ強化・支援作業部会
- 植山 廣紀 : JPCOAR コミュニティ強化・支援作業部会

JPCOARができるまで～リポジトリコミュニティ前史

植山：日本の機関リポジトリの歴史をたどると、DRF、JAIR Cloudコミュニティ、そしてIRPCという3つのコミュニティを統合するかたちでJPCOARが誕生したようですが、そもそも、こういった目的で誕生したのでしょうか？

木下：みなさんをご存知のとおり、日本初の機関リポジトリは千葉大学のCURATORですが—これはもう神代の世界ですね（笑）—、同じ時期の2005年にNIIが学術機関リポジトリ構築連携支援事業（以下、CSI事業）というのを始めました。それがそもそもの発端だと思います。その委託事業の柱の1つが「コミュニティ形成」で、そのなかでDRFという団体が発足しました。DRFは、大学単位で参加する組織ではあったのですが、実際には主に個人単位で参加しているようなかたちで国際的・先進的なさまざまな事業を積極的に進めていました。ところが、CSI事業も計画の5年で終わってしまい、DRFもJUSTICEみたいに会費をとらないと団体として続けられないということが問題になりました。会費を集める計画もあったのですが、頓挫してしまい、それに代わるものとしてのIRPC、ひいてはJPCOARの発足になったのではないかと、そのように私は認識しています。

尾崎：DRFは、そのあたりの政治的なことがわからず、自由にやらせてもらっていました。基盤とお金はないけどやる気だけはああるという…… 良くも悪くも若くて…… でも貴重な時代でしたね。

江川：資料を見ると、CSI事業は2009年度で終わっています。DRFは2006年に立ち上がって、「図書館の新たな役割を発見した！」という感じで、すごく盛り上がっていました。でも、CSI事業が終了し、コストをみんなでどう負担していくか、コミュニティをどう活性化するかということを悩んでいた時期もあったんですね。そのあと、「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」がスタートして、IRPCが発足しました。課題整理をしていく中で、DRFとの役割の切り分けや協力体制が難しく、一本化して一つのコミュニティになったほうがいいよね、という認識の共有が、JPCOARの誕生につながりました。

岡部：私はその頃はほとんど外野で、たまに機関リポジトリ担当としてかかわるだけでした。私は今、日本図書館協会というところにいます。日本図書館協会では、個人会員と施設会員というのがありますが、どちらかと言うと活動熱心なのは個人会員の方々なんですね。現在のJPCOARは個人会員にあたる人がいなくて、施設会員だけという形になってしまっているのが、みんなが参加しにくくなっている理由かなとも思います。個人会員もJPCOARに参画できるようにすると面白い動きができるのかなとも思います。

植山：団体としての基盤と活性化の両立ですね。JPCOARという一つの団体になるにあたっては、それぞれの団体の目的や所属されている方の違いなどでご苦労されたことも多かったのではないのでしょうか？

江川：一本化はIRPCが音頭をとって進めたんですけど、DRFからは、メーリングリストや広報誌などの遺産を引き継いでほしいという要望が出ましたね。だから、このコミュニティ作業部会はDRFの遺産を一番色濃く受け継いでいる大事な部会だと思っています。JAIR Cloudコミュニティは小規模機関が多くて中心になるところがなかったことに加えて、やがてはJAIR Cloud有料化を実現しなければならない事情もあったんじゃないかと思います。

岡部：私は事情をよくわからず委員長を引き受けたんですが、当初は、規則や協会としての体裁を作っていくところがまだあまりできていなくて、結構大変でした。部会やタスクフォース等を整備して、体制ができるまで2年かかりました。逆によくわかってないからやれたのかも。

植山：発足時のミッションや「JPCOARオープンアクセスリポジトリ戦略2019-2021」はどのような経緯、背景で決められたのでしょうか？

岡部：協会としての目標を掲げてはいましたが、具体的にどう進めていくのか、があまり整ってはいませんでした。協会としては、それをどうやって達成するかを示すために、戦略を作り、実行していく作業部会を整備しました。

江川：JPCOARの設立趣意書を作っていた時期に、先進的な一部の大学は既にオープンサイエンス（以下、OS）を考え始めていたので、趣意書にも入れましたが、私が運営委員長をやっていた2年間、会員全体ではあまり進めることができませんでした。一般の教員にはまだまだOSが浸透していないと感じています。

参加機関の広がりを見せてきた課題

大園：JPCOARの参加機関数を見ると、発足当時444機関から今は687機関(2021年8月現在)にまで増えています。ミッションや目標を見るとOSを掲げていますが、実際の参加機関は小規模大学が多く、そこまで取り組めない大学も多いと思います。JPCOARはどのように運営をしたらいいのかと気になります。

江川：難しい問題ですね。

岡部：掲げている大きな理念と、会員が望むものというのが少し乖離しているところがあるのだらうと思います。JAIR Cloudの利用を主目的としてJPCOARの会員となっている機関にとっては、まだOSは自分たちにはあまり関わりがない、と

ういう認識があるのはしょうがない面もあると思います。

木下：一部の熱心な人と一般ユーザーとの乖離という問題は、大きな組織になるとどうしても起こることですね。JPCOARでいうと、国内のOAを先頭に立って進めてきたDRFと、クラウド型で構築が容易なJAIRO Cloudを使いたいがために参加しているコミュニティとが一緒になった背景があるので、これを一体にするのは大きな課題だと思います。そのようななかでこれから何をすればいいのかというと、たとえば、国際会議に出て発表したり、面白いことを講習会で話したり、JPCOARで仕事をしているといいことあるなあ、と、楽しいところを見てもらって、徐々に惹き付けていけると構造的な乖離を埋めていくことになるのではないのでしょうか。いまは、熱心な人と一般ユーザーとの比率が3%対97%くらいになっているような感じがしています。

植山：OSという、最近では研究データ管理がよく言われますが、現場としてはどうしてもハードルが高いように思います。図書館やリポジトリに求められる役割がますます増えていくような気がしてしまって……

木下：OSは、図書館だけではどうにもならない問題なんですよ。ある大学の事例を紹介すると、その大学ではトップからの指令で、研究データに関わるポリシーをとにかく早急に策定することになったそうなんです。ところが、研究データ管理については図書館だけでなく研究推進部門、情報基盤センターなどと一緒にやらないといけないんですが、調整や協議を進めるのがとても難しい。特に研究推進部門は研究費を取ってくることや、外部資金を扱うことを担当する部署なので、それだけで結構忙しくてなかなか手が回らないですからね。そういったわけで、OSを進めていくことは簡単なことではないので、図書館だけでなく、できるだけ学内の関係部署と連携して、巻き込んでいくことがポイントですね。

COVID-19とJPCOARの活動

植山：最近の話題でいうと、JPCOAR運営委員会は2020年の6月に、「COVID-19以降の社会に向けたオープンアクセスの加速について」を発表しました。どういった経緯で作られたのでしょうか。

江川：初めは、COVID-19の感染拡大の直下で「いますぐこういう行動を起こそう」という呼びかけを考えました。でも最終的には、もうちょっと長めのスパンでOA・OSを進めていきましょう、という方向に転換して作成しました。ちょうど2020年頃から、DX（デジタルトランスフォーメーション）という言葉が出てきましたよね。単にコロナ禍の喫緊の対策というだけではなく、大学も社会全体もデジタルの方向にシフトしようという中で、リポジトリもそのツールの一つとして価値を持っていけるはずだから頑張りましたよ、という方向に変えました。

大園：今で言えば、この座談会もオンラインでやれていますし、JPCOARの活動も、昨年度から対面はほとんどなくなっています。作業部会員もみんな一度もリアルで会ってない。

山田：オンライン開催だと、業務の合間で「1～2時間だけ」という感じで、参加しやすいのは確かにあります。

江川：それは大きいですね。出張だと、上司が必ずニコニコ笑って許すとも限らないし（笑）。

山田：今はリポジトリを離れて図書館サービスを担当しているのですが、リポジトリ担当を離れても活動を継続しやすいという点は、オンライン開催の大きな利点だと思います。

JPCOARに参加する意義やメリットとは？

山田：さきほど、「JPCOARの理念」と「参加機関が望むもの」の乖離のお話がありました。JPCOAR参加機関や機関リポジトリの役割が多様になっているなかで、JPCOARに参加する意義やメリットを伝える必要があると思います。

尾崎：JAIRO Cloudを利用していないけれど、JPCOARに参加している機関へのメリット、というのがいまだに明確に説明できないんですが、いわば、コミュニティに帰属していることそのものがメリットだと思ってほしい。

山田：メーリングリストで何か訊きたいことがあったら会員相互で訊けるのは大きなメリットだと思います。あと、資料が参考にできるとか。

大園：ただ、JPCOARって思想的に基本オープンなので、その成果は参加しなくても見れるんですよね。

江川：そこはいつも議論になるところ。会員だけの特典は何かという点と難しいんですが、JPCOARで楽しく仕事をしている人の姿を見る、そういう人と直接コンタクトを取れる機会があるというのはメリットですよ。

山田：JPCOAR全体で座談会や相談会みたいなことができたらいいいですね（笑）。

岡部：メリットについては参加者の人材育成は大きいですね。加えて機関に対するメリット、例えば、JAIRO Cloudを利用していない機関に対しては、学術情報流通について「今の状況を変えていけるようなコミュニティである」と言える必要があると思います。

山田：大学全体でOSを取り組んでいかなければいけない中で、例えばOSの基本ドキュメントをまとめているサイトを作っていますが、「それを活用すると説明に使えますよ」という

ことなど、理解をしていただくよう説明していきたいですね。

江川：今の話を聞きながら、私が運営委員長だった時に、作業部会員と話す機会があまりなかったなと思いました。JPCOARの作業部会に入ると、こういうメリットがありますということを説明できる機会があるといいですね。

リポジトリの活性化に向けて

木下：JPCOARの活動はマニアックになりがちな傾向もあるので（笑）、活動の意義について、参加機関や一般社会にアピールするとともに、それをわかりやすく伝えていく通訳の役割も大事で、機会をとらえてやっていきたいと思います。まだまだOSとか機関リポジトリの認知度は高いとは言えないので、たとえば、COVID-19の論文がオープンになったこと、あれはOSや機関リポジトリの活動があったからできた、ちゃんと役に立っています、といったようにアピールしていくことが大切です。

岡部：日本図書館協会の加盟館は多くは公共図書館で、リポジトリはまだまだ別世界の話です。しかし、シチズンサイエンスの観点からは、リポジトリコミュニティに、公共図書館も巻き込んでいけると良いですね。郷土資料などのデジタルアーカイブや、そういうものの発信にもリポジトリはもっと使ってもらっていいと思います。

江川：OAの論文や資料に直接アクセスして、リポジトリで公開されているとは気が付かずに読んでいる人はずいぶん増えていると思いますよ。

大園：JPCOAR仕様のリポジトリコンテンツをアピールするカバーページがあったらいいですね（笑）

尾崎：広告料が取れるかも（笑）

植山：リポジトリのアクセス統計を見ていると、最近話題になった時事的なことで探してたどり着くということは少なくなっていると思います。それが、リポジトリというシステムをつかっていうことが、より広まるといいですね。

江川：人文社会学系では、紀要論文とかで、リポジトリにこんな論文が上がっていて面白いというのが、たまにSNSで話題になっていたりしますよね。

これからのリポジトリ担当者に期待すること

大園：リポジトリ担当者は、トレンドを常日頃吸収していかなければいけないのかなと思っています。そこで、いまリポジトリ担当をしている主に若手に期待することを一言いただきたいです。

木下：まず何よりも「大学図書館での仕事はやめないで続け

てね」。そして「年寄りの言うことを信じすぎるな」です（笑）。私としては、大学図書館を面白い職場にしていきたいとは思っていますが、年寄りなので感覚が違うんですね。若い世代の方はデジタルネイティブでSNSとかBacklogとかを使いこなしていますよね。でも、それがどういうふうに便利で、図書館サービスに活用したときに一般利用者にどう受け取られるか、私たちのような年寄り世代にはわからないんですよ。だから、年寄りが言うことよりも、自分たちの感覚の方が正しいと考えて、周りの人たちと信頼関係を築きながらいろいろと新しい試みを進めていってほしいです。それを、適度な狂気をもって楽しくやってくれたら、周りもついてくるし自分も楽しくやれるのかなと思います。

江川：40代や50代の、若い人のちょっと上にいるくらいの人たちが、若い人なるべく自由にしてあげてほしいなあと思います。それこそDRFのときに、部課長たちに白い目で見られながらも自由にやっていた人たちが、いま課長や副課長になっていますよね。むかしの自分たちを思い出して、若手に裁量を与えて、若手の仕事をサポートしてあげてほしいです。若い人というよりも、その少し上の人に言いたいことになりましたが。また、私は現在、国立国語研究所というところにいます。人文系の研究所であり、研究データも積極的に扱っているので、リポジトリはとても重要だと思っています。今後ともいろいろな発信をしてもらえると現場としても助かるので、よろしくお願いします。

岡部：若い方はもっと自信をもって、自分の考えを上司にしっかりと伝えてほしいなあと思います（笑）。いま上司になっているひとたちは、ちゃんと聞く耳を持っておられる方が多いと思うので、自信を持っていだけたらなあと思います。あとは、係になったからその仕事をやるというのではなくて、リポジトリであるとか、学修支援であるとか、自分が図書館員として働く中で、テーマを持つことです。自分は学術情報流通やリポジトリに関心があるんだということだったら、目の前の業務とは違っていても、それへの興味は持ち続けてほしいと思います。

大園：ありがとうございました。それでは時間ですので、座談会はここで終わりといたします。

（一同） ありがとうございました。

この座談会は2021年8月6日に実施しました。

座談会まとめ：

コミュニティ強化・支援作業部会 植山 廣紀

気になる話題を

Pick Up!



JaLCメタデータオープン化に伴う著作権処理の対応

[JPCOAR-Comm:62] メタデータのオープン化に伴う著作権処理に係る情報提供のお願い

[JPCOAR-Comm:71] メタデータのオープン化に伴う対応について

Q ジャパンリンクセンター（以下JaLC）は書誌データ、URI、引用情報、抄録のメタデータのオープン化を開始した。これはJaLCシステムに登録された書誌データ等の第三者による自由利用を目的としている。また、文献検索サービス等にメタデータが登録されることで、DOI登録コンテンツへのアクセス数の増加及び、メタデータの新たな利活用とサービスの創出を期待している。

JaLCメタデータのオープン化に伴い、NIIが取り纏めるJaLC準会員の内、DOIを取得しており、かつ、JPCOARスキーマを利用する又は今後利用を予定する（JAIRO Cloud（WEKO3）利用含）機関は、2022年4月迄に（以降はNII学術機関リポジトリデータベース（以下IRDB）を通じJaLCシステムに抄録のメタデータが提供される予定）、「抄録」の著作権処理を完了しておく必要が生じている。この**抄録の著作権の権利処理に係る各機関の対応につき情報提供を募りたい。**

A（複数の機関より以下の回答が寄せられた。）機関リポジトリの**運営指針を改正**し「抄録のメタデータを公開する」、「第三者による二次使用を許諾する」という条項を明記した。ただし「抄録の著作権者が許諾しない場合はその限りでない」という条項もあわせて追記している。機関内の自他部局で発行するレポートや紀要等においても、場合により**投稿規程の改正**が必要と考える。既に**登録済の抄録の著作権処理は、オプトアウト形式で実施する**。ただしこの場合「メタデータのライセンスをCC0にできない」、「著作権が出版社に譲渡されている場合、個別交渉が必要」といった課題もある。現在、抄録の公開許諾フラグに関するシステムのカスタマイズを検討しており、著者自身による登録の際も抄録の公開可否及びライセンスを選択できるよう対応予定である。

補 足

著作権者より抄録のメタデータ公開の許諾が得られなかった際等、JaLCシステムに抄録が連携されるのを避けたい場合は、あらかじめ「datacite:description@descriptionType="Abstract"を出力しない」と設定しておく必要がある。設定方法の詳細は、IRDBの「[JaLC参加規約及び運営規則の改正に伴う「抄録」の取り扱いについて](#)」を参照されたい。

抄録のメタデータのオープン化は国際的に推進されており、[Initiative for Open Abstracts \(I4OA\)](#) は抄録の利用を人の目で読むためのみに留めるのは不十分と指摘している。その上で、メタデータを含む抄録のオープン化は学術文献全文のOA化より遥かに短期的に実現可能と説明しており、すべての抄録を共通のフォーマットで検索可能なデータベース（例えばCrossrefやJaLC）にまとめ、API等を介しアクセスできるようにすることは、学術文献の発見や大規模な再利用を容易にする点で、大きなメリットがあるとしている。

- ・JaLC「ポリシー | メタデータのオープン化」 https://japanlinkcenter.org/top/about/about_policy.html#s003（2021/09/14確認）
- ・IRDB「JaLC参加規約および運営規則の改正に伴う「抄録」の取り扱いについて」
<https://support.irdb.nii.ac.jp/ja/news/20210707>（2021/09/14確認）
- ・JPCOAR「IRDBデータ提供機関のためのDOI管理・メタデータ入力ガイドライン：JPCOARスキーマ編」
<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/records/160>（2021/09/14確認）
- ・Initiative for Open Abstracts(I4OA) <https://i4oa.org/>（2021/09/14確認）

今回のテーマは、横浜国立大学、関西大学に話題提供いただき、九州大学、日本原子力研究開発機構、岡山大学に情報提供いただきました。ありがとうございました。

[JPCOAR Mailing List](#)（以下ML）は、JPCOAR Community ML（協会の活動や会員機関相互の情報共有用）、JPCOAR JAIRO Cloud Community ML（JAIRO Cloudのユーザーサポート・相互協力用）の2軸で運用しています。過去の話は各MLアーカイブよりご覧いただけます。今後もMLへのご協力をお願いします。

コミュニティ強化・支援作業部会 山田 裕果



作業部会員の活動紹介

○ JPCOAR事務局

JPCOAR事務局は、2021年度よりJPCOAR会員機関からの派遣による専任の事務局員1名、非常勤職員1名およびNIIからの支援要員1名の体制となっています。JPCOAR会員機関からの派遣である筆者は、専任の事務局員として、JPCOARの総会、運営委員会、作業部会、JAIRO Cloud運用、JPCOARの活動に関連した調査、研究等のための事務処理の統括をおこなっています。

これらの業務の他に、事務局員は各人の興味、関心に基づき、JPCOARが行う調査、研究等に参加することができます。筆者は2020年度-2021年度、研究データ作業部会の事例形成プロジェクトに参加し、国内機関における研究データ管理の取り組み状況調査に協力しています。2021年度はCOAR Community Framework 検討タスクフォースにも参加し、翻訳メンバーの一人として関わった「リポジトリのグッドプラクティスのためのCOARコミュニティフレームワーク」を基にしたチェックリストの作成と活用を検討に加わっています。また、2020年度-2021年度の学術情報流通推進委員会（SPARC Japan）セミナー企画ワーキンググループに参加し、第3回 SPARC Japan セミナー2020において、上記のCOARコミュニティフレームワークと研究データ管理の取り組み状況調査についての報告等を行いました。

国際活動としては、2020年9月に開催されたAsia OA Meeting 2020に出席し、Asia OA Member WorkshopにおいてJPCOARの活動について報告しました。この会議については、カレントアウェアネス-Eにて参加報告を執筆しています（<https://current.ndl.go.jp/e2324>）。また、COAR-Asia OAとJPCOARの共催イベントであるAsia OA seminar series (Japan)での司会や、COAR開催の国際的なリポジトリネットワーク全体の強化と最新化のための戦略ミーティングへの出席等、国外に向けて日本の活動を紹介する機会を得ました。

事務局員として協会運営の視点からコミュニティ全体を見ることで、急速に変化する学術情報流通環境に対応するため、オープンアクセスリポジトリを含む環境整備の重要性を改めて感じ、コミュニティの維持や連携の難しさも知ることができました。クラウド型の機関リポジトリシステムを利用し、680もの機関が参加するコミュニティが形成されている日本のオープンアクセスリポジトリを取り巻く状況は、世界でも類のない例として注目されています。筆者の事務局員としての任期は2021年度末までとなっております。国内外の研究機関等と情報共有し、研究環境に不可欠の基盤を維持していくため、今後の協会運営を担う方に続いていただけることを期待しています。

安原 通代 JPCOAR事務局（国立情報学研究所）

○ JPCOARコンテンツ流通促進作業部会

私がJPCOARの作業部会員になったのは入職3年目のことです。その頃は図書館のシステム担当係に所属しており、ちょうど本学のシステムリプレイスがひと段落ついたタイミングでした。これまで勉強してきた工学的な知識を活かし、最近の技術的な動向を知るためにどうかというお話でした。リポジトリ業務を担当したことはなく、オープンサイエンスについても詳しくは知りませんでしたが、勉強を兼ねて参加させていただくことにしました。

まずはJPCOARスキーマの策定と改定検討に関わりました。はじめは知らない単語も多く、調べながら話についていくので精一杯でしたが、イベントの司会などのできることから担当させてもらいました。XMLスキーマの作成やJPCOARスキーマ説明会での概要説明など、段階を踏んで挑戦させていただけたのがありがたかったです。国際会議にも参加する機会をいただき、多くの国のリポジトリ関係者と交流できたことは勉強にもなりまし、刺激を受けてモチベーションにもつながりました。作業部会員になることで同じ作業部会のメンバーはもちろん、多くの人とイベント等を通じて知り合う機会が増えたことは本務にもよい影響を与えていると感じています。また直接担当している業務以外の打ち合わせや、JPCOAR以外のコミュニティとの合同での打ち合わせ等に参加できることもありますし、コロナ禍以前から打ち合わせにはオンラインでの参加も可能だったので、知識を得られやすい環境だと思います。

現在はまた本学のシステムリプレイスが近づいており忙しくなってきたこともあり、JPCOARスキーマからはすこし離れてSCPJの管理を担当しています。JPCOARが運用を引き継いだ際にデータベースからGoogleスプレッドシートの形式に変換した他、昨年度は各学協会へ情報提供を依頼し、データメンテナンスを行いました。メンテナンスの結果と、そこから見えてきた課題についてまとめているところです。

業務の忙しさは所属する作業部会や担当業務にもよるとは思いますが、年度初めに大枠のスケジュールが組まれるので、大体はそれに合わせて本務を調整しています。もちろん予定外の業務がでてくることがあり、たとえばSCPJのデータメンテナンスを行ったときは想定以上の問い合わせがきてしまい対応が遅れてしまうこともありました。その時は手のあいているメンバーに助けられたり、担当を割り振りをしたりすることで対応できました。作業部会員の業務が気になっている方、参加を検討している方の参考になれば幸いです。

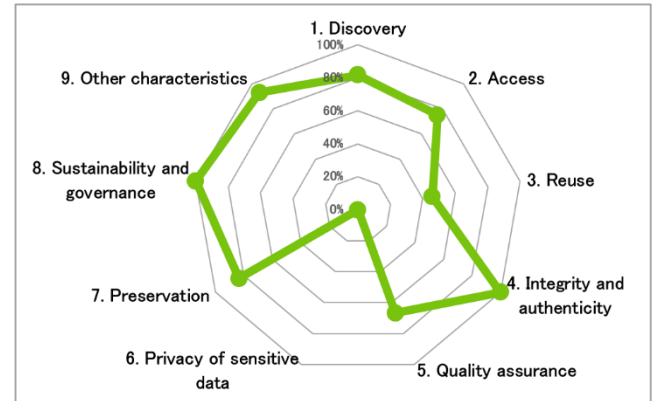
松村 友花 コンテンツ流通促進作業部会（神戸大学附属図書館）

COAR Community Framework検討タスクフォース活動紹介

本タスクフォースは、2020年10月にオープンアクセスリポジトリ連合（COAR）が公開したリポジトリのフレームワーク“COAR Community Framework for Good Practices in Repositories”を用いて国内の機関リポジトリを評価・分析し、課題の抽出を行うことを目的としています。具体的には、以下の2つを中心に活動を展開しています。

1) COAR Community Frameworkチェックリストの作成

本タスクフォースの検討対象であるCOARのフレームワークは、9つの観点からリポジトリが提供すべき標準的なサービスのあり方を定めていますが、具体的な要件に落とし込むにあたっては解釈の余地が含まれています。そこで、タスクフォースではフレームワークが定める要件を実務レベルで解釈し、日本の文脈で機能や運用を確認できるチェックリスト及び解説を作成しています。本チェックリストによって、リポジトリ担当者は本フレームワークの達成度を実務的な観点から評価できるようになり、リポジトリの運用計画を考える際の基礎資料として用いることが可能になります。さらに、達成度を複数機関で比較することによって、自機関のリポジトリの強み／弱みを把握するだけでなく、共通の課題抽出や機能面・運用面での改善に繋げられる可能性があります。



図：チェックリストによる達成度評価イメージ

2) チェックリストを用いた国際連携とCOARへのフィードバック

COARフレームワークは複数国のメンバーによって策定され、2021年7月現在、8か国語に翻訳されています。このような地域的多様性の観点からフレームワークをレビューするため、タスクフォースではAsia OA参加国の方々と連携して、チェックリストの回答項目を各国のリポジトリ業務に沿った形へローカライズし、チェックリストに基づく複数国でのデータ収集を企画しています。得られたデータを国際的に比較することで、各国のリポジトリ業務の特徴が明らかになることが期待されます。さらに、実践を通じて得られた気づきをCOARへフィードバックすることで、機関リポジトリの評価フレームワークに関する議論へ貢献することができると考えています。前回実施されましたAsia OAでの議論はJPCOARウェブサイトで資料と動画が公開されていますので、是非ご覧ください。

1. <https://www.coar-repositories.org/coar-community-framework-for-good-practices-in-repositories/> (2021/09/14確認)

日本語訳：<https://doi.org/10.34477/00000534> (2021/09/14確認)

「オープンサイエンス関連の基本ドキュメント」を公開しました

国内のオープンサイエンスに関する政策文書等のドキュメントのうち、主要なものをまとめたリンク集をJPCOARウェブサイトで公開しました。今後も随時更新の予定です。オープンサイエンスについて最初に学ぶときの取っ掛けや、オープンサイエンスについて関係者へ説明を行う際の情報源としてぜひご活用ください！

クイックリンク

JPCOAR作成ツール

- JPCOARスキーマガイドライン
- DOI管理・メタデータ入力ガイドライン: JPCOARスキーマ編
- DOI管理・メタデータ入力ガイドライン: juni2編
- 学協会著作権ポリシーデータベース (SCPJデータベース)
- オープンアクセス方針策定ガイド 改訂版
- RDMトレーニングツール
- 教材「研究データ管理サービスの設計と実践」

リンク集

- オープンアクセス方針リンク集
- オープンサイエンス関連の基本ドキュメント
- おすすめのOAリソース

Check!

オープンサイエンス関連の基本ドキュメント

国内のオープンサイエンスに関する政策文書等のドキュメントのうち、主要なものをまとめた（随時更新）。オープンサイエンスについて最初に学ぶときの取っ掛けや、オープンサイエンスについて関係者へ説明を行う際の情報源としてご利用ください。

政策文書等

内閣府

科学技術・イノベーション基本計画（科学技術基本計画）

- 第5期科学技術基本計画
- 第6期科学技術・イノベーション基本計画

統合イノベーション戦略

- 統合イノベーション戦略（イノベーション戦略調整会議、2018.6閣議決定）
- 統合イノベーション戦略2019（イノベーション戦略調整会議、2019.6閣議決定）
- 統合イノベーション戦略2020（総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）、2020.7閣議決定）
- 統合イノベーション戦略2021（総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）、2021.6閣議決定）

報告：NII 学術情報基盤オープンフォーラム 2021

今年のオープンフォーラムのテーマは、『次世代学術研究プラットフォーム』であった。その中で、機関リポジトリはNII研究データ基盤（NII Research Data Cloud）に関わることになる。どのように関わるのか、私見を交えながら振り返りたい。

NII研究データ基盤は、データ管理基盤であるGakuNin RDM、データ公開基盤としても期待されるWEKO3、データ検索基盤となるCiNii Researchで構成される。ここでは、図書館は研究データ管理について新たな役割を担うことが期待されている。このことは、「公的資金による研究データの管理・活用に關する基本的な考え方^{*1}」において「機関リポジトリを有する全ての大学・大学共同利用機関法人・国立研究開発法人においては、2025 年までにデータポリシーを策定する」ことや「機関リポジトリへの研究データの取載と研究データへのメタデータの付与の推進」が触れられていることからわかるだろう。

研究データ管理に図書館員はどのように関わるのか

RCOSトラック6「研究データ管理支援者に求められるスキル」では、研究データ管理の支援業務に求められる知識、技術、能力、行動特性の総称として「標準スキル」を提案している。標準スキルでは、研究の進行段階に応じて求められる様々なデータ管理の実務に必要なスキルとそれをサポートする部署がまとめられ、図書館員が何の業務を担当し、どのようなスキルが必要なのかを把握することができる。例えば、「研究データの保存支援」業務には「メタデータの付与支援」業務が含まれ、専門スキルとしては「メタデータ」の知識が必要で、担いうる職種の一つに図書館が含まれることがわかる。標準スキルが近日公開予定^{*2}であり、大学等の研究機関は支援機能や支援人材の確認、支援体制の構築等に活用することができる。

研究データ管理に関わる知識はどのように学べるか

RCOSトラック2「学認LMS」では「研究データ管理講座」が紹介された。『研究データ管理サービスの設計と実践』では、研究プロセス（研究前、研究中、研究後）に沿って、研究データ管理と支援サービスの構築に関する基本的な知識を学ぶことができる。『研究者のための研究データマネジメント』は、同様に研究プロセスに沿いながら、より細かくテーマごと（例えば、「研究中」の「データの検索・発見・収集」）に必要な知識を取得できる構成になっている。学習対象は、前者が図書館員を含む支援者向け、後者が研究者向けとなっている。後者は細かいテーマ設定でピンポイントに学ぶことができ、個人的には、研究者だけではなく支援者にとっても学びやすい構成になっていると感じた。それぞれ重複する内容も含まれているが、支援者の視点と研究者の視点で両方を受講しても良いだろう。

将来的には現在の教材をマイクロコンテンツ化し、前述の標準スキルと対応する形でRDM教育コンテンツとして再編され、学習者の職務やスキルに応じて柔軟に学習できる環境となる予定である。標準スキルとともにアップデートされ、研究データ管理の学習環境が充実していくことを期待する。



リポジトリは多様化するコンテンツとどう向き合うか

RCOSトラック5「次世代機関リポジトリ」では、「RoV（Record of Versions：複数のバージョンの記録）」の観点から次世代の機関リポジトリの在り方を提案している。RoVは、研究成果を論文だけではなく、研究データやソースコードなども含めた多様なバージョンの一連の記録としてとらえる考え方で、論文だけ見てもプレプリント、AM（Accepted Manuscript＝著者最終原稿）、VoR（Version of Record＝出版社版）等の様々なバージョンが存在する。デジタル化の時代では多様な研究成果を適切なプラットフォームで公開することが重要となり、プレプリントサーバやデータリポジトリ等が積極的に利用されている研究分野も多い。次世代機関リポジトリを考えるには、機関リポジトリがこれら「多様なコンテンツ」の「適切な」プラットフォームとなりうるかを考える必要があるだろう。

本トラックでは、リポジトリ業務のワークフローやコンテンツの利用状況を分析し、従来の運用ポリシーを見直すこと、具体的には人社系の利用者に対しては紀要、理工系の利用者に対してはAM（特に他の機関のリポジトリにも登録されていないもの）を重視すること、そして新しく研究データ等の多様なコンテンツを扱うことを提案している。次世代機関リポジトリとしてのWEKO3は、AM登録支援機能として、二次文献DB（例えばWeb of Science）と連動した機関ごとのAM論文アラート機能、紀要の品質管理を目的としたピアレビュー機能、研究データから成果論文までの一元的管理を進めるため、コンテンツの利用状況に応じた制限公開機能等を提案している。RoVは多様なコンテンツを永続識別子でリンクさせ、一元的にアクセスできることが重要であり、次世代機関リポジトリは、識別子の表現が充実しているJPCOARスキーマをフル活用することで、そ

これらの適切なプラットフォームとなるだろう。

なお、研究データポリシーについては、多くの大学がこれから作成することになる。RCOSトラック4「AXIES-RDM部会との合同セッション」で「大学における研究データポリシー策定のためのガイドライン*3」を紹介している。研究データ管理を進めるにあたって学内の合意形成を進めるためのガイドラインで、その成果としてポリシーが完成することを狙っているもので、これからポリシーを作成する大学は参考にするとよい。

多様なコンテンツの統合検索環境としてのCiNii Research

CiNii ResearchはCiNii Articles、Books、Dissertations、IRDB、KAKEN等のデータベースを内部で統合し、重複データの名寄せやコンテンツ間のリンク関係（親子関係、引用関係等）を強化することで、アクセス性の向上を図る方針である。IRDBは機関リポジトリ由来のデータであり、各機関リポジトリがJPCOARスキーマに対応し、メタデータ（特に識別子）を充実させれば、CiNii Researchのアクセス性向上に貢献できると思われる。リポジトリ業務の課題の一つは、AM論文の登録割合が少ないことである。上述のWEKO3のAM論文アラート機能に加えて、RCOSトラック1「CiNii Researchと大学図書館」で提案された、CiNiiの検索結果から行うOA論文のリクエスト機能は、機関リポジトリ業務のボトルネックである、AM論文登録を省力化する仕掛けとなるので、その実現を期待したい。

コンテンツトラック1「次期JAIRO Cloud (WEKO3) 本番移行に向けて」では、本番移行に向けた概要説明や先行移行機関からの事例報告がなされた。開催後、本番移行の延期が決定されたので、最新情報についてはJPCOARのWebサイト等をご参照いただきたい。

コミュニティ強化・支援作業部会 大園 隼彦

参 照

・NII 学術情報基盤オープンフォーラム2021 7/6～8 オンライン開催

<https://www.nii.ac.jp/openforum/2021/> (2021/09/01確認)

*1 公的資金による研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方

<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kokusaipen/sanko1.pdf> (2021/09/01確認)

*2 研究データ管理支援人材に求められる標準スキル (ver.0.1)

<https://doi.org/10.20736/0002000219> (2021/09/21公開確認)

*3 大学における研究データポリシー策定のためのガイドライン

https://rdm.axies.jp/_media/sites/14/2021/07/urdp-guideline.pdf (2021/09/01確認)

編集後記

昨年、編集を担当した際（11号）ではリモートワークのアンケートを実施しました。1年後もリモートワークを実施しているとは……このような状況なので、OAはますます重要になると思います。JPCOAR5周年！！参加館で相互協力して推進していきましょう！

（大園）

JPCOAR 5周年おめでとうございます！今回の座談会ではJPCOAR以前の裏話やこれからの対するエールも伺うことができ、私自身大変貴重な機会となりました。今号も作成にあたり、多くの方にご協力いただきました。この場を借り、お礼申し上げます。

（山田）

5周年記念座談会はZoomを活用しました。このCoCOARの編集もそうですが、様々なことがオンラインで行われるようになり、その恩恵を感じる今日この頃です。今号全体を読み返して、日々の業務の傍ら、新しい取り組みには常日頃、目を向けて興味を持ち続けておきたいと思いました。

（植山）

Webサイト : <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>

Facebook : <https://www.facebook.com/jpcoar/>

Twitter : <https://twitter.com/jpcoar/>



JPCOAR Newsletter: CoCOAR 第13号

2021年9月30日発行

オープンアクセスリポジトリ推進協会

